

郷土文化財紹介

石造物シリーズ

<馬頭観音石像>

坂下地区のあちこちで路傍に馬頭観音石像が見受けられる。『坂下町の石仏』（坂下町文化を守る会編）で確認される石像数は、町組区4基、合郷区6基、下組区22基、上野区5基となるが、古老にお尋ねするとこれ以外にも山中に見受けられるという。これほど多くの馬頭観音石像が見受けられるのは何故でしょうか。



↑ 堀懸観音堂の馬頭観音



↓ 西方寺の馬頭観音

仏教に「六道」の輪廻という考え方があり、その1つが「畜生道」です。この世界から衆生を導き救うのが「馬頭観音菩薩」です。3面6臂で忿怒の相をしており、頭上の馬頭が煩惱を食い尽くすとされています。人の気持ちに喝を入れる要素があるようです。



↑ 握観音堂の馬頭観音菩薩
3面6臂で釣り上がった目尻と逆立つ髪形の忿怒の相で我々をにらみつけている。残念ながら左側二臂がずり落ちています。

ところが、路傍にある馬頭観音像は優しいお顔のものがほとんどです。観音堂の馬頭観音信仰とは少し意味合いが異なるように思われます。



↑ 優しいお顔の馬頭観音
坂下では優しいお顔の馬頭観音が多く見受けられる。この馬頭観音は握地内のもので比較的新しい。

「広辞苑」で調べて見ると、「頭上に馬頭をいただいて忿怒の相をなした観音菩薩。……馬頭明王ともいい、8大明王の1つ。馬の保護神として特に江戸時代に広く信仰された。」とありました。やはり路傍の馬頭観音への思いは、人の本能的行為を戒めるというよりは馬の健康や活動での保護を願う身近な信仰へと変わってきたようです。

それでは、江戸時代、馬はどれぐらい飼われていたのでしょうか。明治5(1872)年の『坂下・上野村明細帳』には、「美濃国坂下村の家数359軒、人数1974人、馬263疋」とあり、「美濃国上野村の家数68軒、人数416人、馬98疋」とあります。家数に占める馬数の割合はかなり多いと言えます。明治になって突如馬数が増える訳もないので、坂下地区では江戸時代から馬が多く飼われ使用されていたと考えて間違いないでしょう。

馬はどんな作業をさせられていたのでしょうか。苗木藩の米所坂下と言うことは、田畑起こしや代掻き、田に踏み込む草の運搬が主なものであった。また身の回りで重いものを運んだり山から木材を引き出す作業にも使役させられていました。握出身の稲熊万栄画伯が描かれ坂下町へ寄贈された「昭和初年の回想 馬の仕事」でそれらの

風景を見てみます。



↑田起しの風景

↓振り分け荷造りの風景



↑どたびきの風景

前述の仕事以外にも馬は使役されていました。『坂下町史(平成16年版)』で江戸時代の馬に関する記録をみます。

『五人組御仕置(寛政5(1793)年)』の中に「一、捨て馬は決してしてはならぬ云々。また、牛馬の売買については出所聞き届け、確かな保証人立て売買すること」

「一、生き物憐れみのことに心懸け・・・いつくしみのないことは一切しない」等とあり、馬の扱いを厳しく規制しています。

『伝馬起請文前書き』では

「一、中津川宿落合宿の助馬の儀仰せ付けられ候少しも我俣仕らず・・・馬急度出し申すべき事云々・・・」とあり、伝馬役を強制させられています。

『奉願上候伝馬平均之事(享和元(1801)年)』では、

「一、人足298人	本馬32疋	合郷組
一、人足410人	本馬46疋	町組
一、人足307人	本馬33疋	下組・

・・・」と記されます。

明暦元(1655)年幕府が定めた宿駅人馬の制を受け、坂下や上野は落合宿の助郷として馬を供せねばならなかったのですが、坂下村は三郷制を布いていたので他村と比べてよけいに多くの人馬を供せねばならなかったようです。

「宿駅高札」の一文には

<一、駄賃人足荷物之次第 御伝馬並駄賃荷物一駄重さ四〇貫目(150 kg)・・・>とあります。

こうしてみると、馬はその取り扱いも細かく定められていて、頻繁に伝馬役が課せられ大勢の人足と共に多数の馬を提供させられていたようです。幾らかの駄賃があるとは言え、非常に重い荷物を長い距離運ばされたようです。この様な馬の扱われ方では、石ころだらけの長い坂や急峻な坂においては馬の事故はかなりの頻度で起こったと考えられます。馬の運行の安全祈願から多くの馬頭観音が路傍に建立されて行ったのでしょう。



↑東町地内(信州田立道、猿鼻道)の馬頭観音「文政十一(1822)年吉日合郷原市蔵」の銘文がある。

馬の安全運行を願ったであろう坂下の立派な馬頭観音を紹介します。坂下地区では急峻な河岸段丘崖や阿寺断層崖の上り下りを余儀なくされてきました。坂下村から苗木町へ荷物を運ぶ道の1つが木曾西古道です。矢渕橋で川上川を渡り吉村の酒屋の少し上方から長坂(木曾西古道)にさしかかります。長い長い長坂を重い米俵の振り分け荷を背負わされた馬の列が続きます。この馬の列は町組や合郷組の若者等が苗木城下へ租税を納めに向かうものです。



↑矢渕橋脇の馬頭観音像
高さ100cmの大きな石仏である。川原石で彫像され風化している。延享4(1747)年建立の坂下地区で最も古いものである。

矢渕橋たもとの馬頭観音に運行の安全を願ってきたばかりです。途中2度ほど休み刀研ぎ石にさしかかります。このあたりは崩落の多いところで馬の事故もありました。路傍の馬頭観音に軽く手を合わせ、もう一息で長坂頭かと馬と自分を励まします。長坂頭へ到着しました。馬に水を飲ませ馬頭観音に長坂を無事登り切ったことを報告し、次に賽の神、上外の二股、鎮野峠と続く行程の安全を祈ったのではな



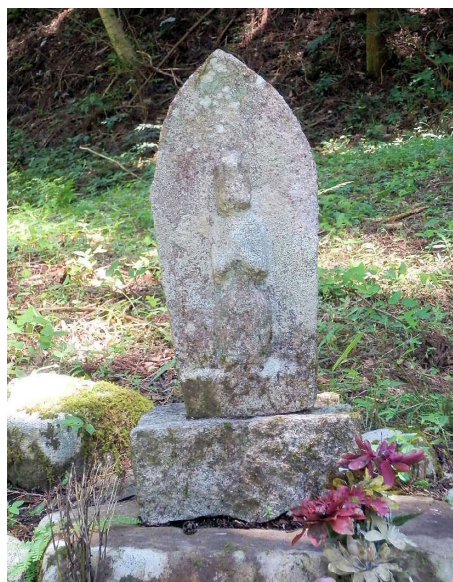
↑長坂刀研石近くの路傍に設けられた小さな馬頭観音像。

いでしょうか。

↓長坂頭の馬頭観音像
高さ176cmの大きな石仏で、上野玄武岩で彫像されていて輪郭もはっきりしている。「町組合郷男子建立」の銘有り。宝暦13(1763)年建立の坂下地区で2番目に古いものである。



坂下地区の馬頭観音石像では、馬の「血取場」に関わる話しが必ずできます。血取場は馬の蹄鉄を取り替えたり、馬の健康管理上定期的に血を抜き取る所であったそうです。静脈に傷を付け血を噴出させたようですので血なまぐささを感じさせる場でもあるようです。「坂下の屋号・地名考」(坂下町史編纂委員会編)では坂下地区にはこの様な血取場(血場)が十数カ所あったと記録されています。先に見たように坂下地区では多くの馬が飼育され使われていたので血取場も多かったのでしょう。飛騨や木曾の血取り場の古い写真には馬を固定する遺構が残っていますが、坂下地区では馬頭観音が残るのみで遺構はまったく確認できません。



↑上野小野沢の血取場に祀られている馬頭観音。場所は沢沿いの平坦地で程よい広さがあり、今も地元の人達により草刈りがなされ祀られている。

↓ 稲熊万栄画伯奇贈画より
鍛冶屋で蹄鉄を替える風景



↓ 高部で血抜き伝承のある馬頭観音像群



最後にいくつかの馬頭観音像を紹介します。坂下には愛らしい名前のある坂道があります。「乙女坂」(時鐘と下外)、「乙坂」ですが、いずれも河岸段丘崖を上り下りする急峻な坂道です。時鐘の「乙女坂」には馬頭観音があります。愛宕山の下の時鐘の平から急峻な坂道を川上川の河原に下りて丸木橋を渡り矢渕の平(宇名嶋)に至りますが、この坂道で馬の事故があったのでしょう。今は中井用水のほとりにありますが、馬頭観音が祀られていました。



↑ 時鐘宮坂を横切る乙女坂と馬頭観音



↑ 東町はずれ田立線の路傍にある馬頭観音
文字書きの馬頭観音。中央の石像は劣化してしまったので右に文字書きで更新されている。



↑ 握観音堂と上外善光寺の馬頭観音像
握観音堂には2体の石像がある。他の観音堂にも数体の石像があるので、他から集められたのかも知れない。

この他にも幾つかの馬頭観音を見ることができます。